
恋と魔法と妖剣と

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋と魔法と妖剣と

【Nコード】

N6955K

【作者名】

鷹嶺綺羅

【あらすじ】

剣道部の助っ人になった羽山達。そこで水瀬は一人の女の子に出会います。人を寄せ付けたがらないその子にはある秘密がありました。その秘密が、とんでもない悲劇を呼び寄せて……目標10話完結！

恋と魔法と妖剣と 第一話

桜井美奈子の日記より

「剣道部の助っ人？」

羽山君の言葉に、思わずラーメンを食べる手を止めた。

場所は明光学園近くのラーメン屋“来々軒”。

建物はオンボロだけど、おいしいし安くてポリュウムがあるから、生徒達には大人気のお店。

私達も学校帰りによく寄る店。

「そつだ」

水瀬君の前に座った羽山君が頷いた。

「……何だか、迷惑そうって顔だねえ」

未亜が言うのももつともだ。

何故か、羽山君は苦虫を噛み潰したような顔だ。

「いろいろあつてな」

そう言うと、羽山君は餃子を食べた。

一口で餃子2つ平気で食べる羽山君の食欲は半端じゃない。

「でも、剣道部って一般人の人達用じゃないの？」

水瀬君が訊ねた。

そつ。

まず、剣道部って所から話がおかしい。

羽山君は騎士だ。

戦闘人種たる騎士と、一般人が肉体で勝負して勝てるはずがない。

いくら剣道といえど、それに変わるところはない。

水瀬君の疑問は当然だ。

「っていつか」

羽山君は、自分の皿が空になったと気づいて、水瀬君の餃子に箸をのばす。

「騎士部門だつてあるんだぜ？」

ラーメンを食べていた水瀬君は、その動きに気づいて、慌てて餃子の皿をかつさらおうとするけど、それより羽山君の箸の方が早かった。

水瀬君のお皿の上から餃子が全て消えた。

「ひ、ひどいっ!」

「本当にヒドイ話だろう?」

「ぼ、僕の餃子!」

「また鈴紀がらみだ。迷惑だってお前だっと思っただろう?」

餃子が一気に羽山君の口の中に消えていった。

「うつつ……」

水瀬君が半泣きの恨めしそうな顔でその光景を見つめている。

気づいているのかどうなのか、羽山君はそのまま続けた。

「騎士だって　　というか、むしろ剣については騎士の方が重視

されるべきスキルだ。だから、剣道部だって騎士向けが存在する」

「……ウチにもあるの?」

私がかっさり訊ねたのは、未亜だ。

「昔は強かったんだよ?」と、未亜は言った。

「全国最強って言われて、剣道部に入るためだけに全国から騎士が入学してきたっくらい」

「ふうん?」

でも、おかしいな。

私、剣道部に騎士がいるってこと自体知らなかった。

自校の生徒にも影が薄いなんて。

「モグモグ……まあ」

餃子を口に放り込んだ未亜は言った。

「そんな時代も数十年前のことだし、段々弱くなってね。今じゃ、普通科の生徒達がやっってる方が主流になってさ。騎士科の生徒達でもよっぽど剣に興味がないと参加しない位で……」

未亜は思い出したように言った。

「本当なら、今年の4月で廃部になるはずだったんだよ」

「…………へえ？」

そんなに実績無いんだ。

「ところが、今の三年で女子が二人、ものすごく強いの入ってね。この二人が全国制覇。それで廃部は免れたんだけど」

「つまり、女子剣道部でしょ？」

私は目の前に座る羽山君と秋篠君をまじまじと見た。

「…………」

「何を想像しているんだ」

それまで黙っていた秋篠君はあきれ顔で言った。

「騎士部門は男女一緒だからな」

「…………そうなの？」

「というか」

未亜は言った。

「ウチ、規模が小さいから、男子と女子分けていたら部が成り立たないんだよ」

「…………ああ」

私は思わず頷いた。

「それで助っ人ってわけだ」

「そういうこと」

羽山君は、水瀬君にコップを渡すと頷いた。

「水瀬、水な？」

「…………」

無言でグラスを受け取った水瀬君は席を離れた。

「それで」

私は水瀬君の残していたチャーシューを食べながら聞いた。

「鈴紀先輩絡みって？」

「さつき話をしたうちの一人、副部長が鈴紀の友達でさ」

羽山君は懨然とした顔で、水瀬君のどんぶりに残っていたラーメンを自分のどんぶりに移した。

「…………で、鈴紀が俺に言ってきたって訳だ」

「それで、羽山君が秋篠君を誘った」
「……いや」

秋篠君は首を横に振った。

「実は、俺の従兄弟が部活やっていてな」

「……ああ。そういうこと」

「大会に頭数が足りないっていうから、とにかく出てくれればいい
って約束で」

「……正直」

あーっ!?

空になったどんぶりを前に呆然としている水瀬君を後目に、私達
は会話を続ける。

「俺達男子部門はオマケだよ」

「オマケ?」

「ああ。期待されているのは男子じゃない。下手すれば」

水瀬君の手から水の入ったグラスをもぎとった羽山君は言った。

「他の女子だって、みんなどうでもいいのかもな」

「……どうということ?」

「警察の騎士警備部が、二人の採用を狙っているんだ」

水瀬、いつまで立ってるんだ?

声も挙げず号泣する水瀬君にそう言い放つ羽山君。

……ちよっとヒドいかな。

チャーシュー食べちゃったのは私だけだ。

「騎士警備部だけじゃないよ」

未亜が言った。

「陸軍の騎士科も」

「すごいじゃない、その二人って将来約束されたようなものね」

「二人はいいさ」

なんか　これ、変に甘いな。

羽山君は顔をしかめたまま、チビリチビリとグラスの水を飲んで
いる。

「気の毒なのは他の連中」

「他の？」

「だってそうだろう？周りは就職はともかく、剣が好きでやってるんだ。それが仲間の引き立て役というか　　噛ませ犬みたいな扱いじゃ、面白くないだろう？」

「剣道部って……裏を返せばそんな感じなの？」

「羽山君の考えすぎだと思っけど」

水瀬君は言った。

「二人が頑張ってるのは、後輩達に部費残してあげたいからだよ？」
「何でそんなこと知ってるんだ？」

「騎士警備部の採用担当してる人、知ってるから」

「お前が？」

「お父さんの愛人だから。スゴい美人さんでエライんだから」

「そういうこと、はっきり言っなよ」

「羽山はそういう理由だろうが」

おごりだ。

秋篠君は別に頼んでいたジャスマン茶を手渡してくれながら言った。

感謝！

「俺は別だ」

「従兄弟のため？」

「ああ」

秋篠君が頷くと、未亜がニタニタと変な笑みを浮かべた。

「にゃあ……女の子狙いだもんねえ……冬矢君とつやだっけ」

「え！？何それ！」

「桜井、ホントはゴシップ好きなんだな」

「コホン……とにかく」

「まあ」

秋篠君はカップから立ち上る香りを楽しみながら言った。

「明日、部活に顔を出すことになってるんだ。顔を出せば……おい、

羽山？」

秋篠君の横にいた羽山君が突然、お腹を押さえてうつむいた。青くなつた顔から脂汗が流れている。

「ど、どうしたの？」

「ち、ちよつとトイレ」

席を立つた羽山君は小走りにトイレに向かう。

「さてと」

何故か水瀬君が平然と席を立つた。

「支払いは羽山君で、と」

そのまま帰り支度を始める。

「おい？」

秋篠君が止めた。

「お前、友達に何か起きたら」

「友達のラーメン食べるからだよ」

水瀬君はニコリと笑いながら、ポケットから出した小瓶を小さく振った。

強力！よく効く下剤。

瓶に張られたラベルには、そう書かれていた。

「帰るか」

「じゃあ。羽山君、ゴチ」

「ごらっ！」

「じゃあ？美奈子ちゃん、払ってくれる？」

羽山君、ごちそうさまです。

翌日。

「テメエ！本当に覚えておけよ！？」

激怒する羽山君につれられて、私達は剣道部へ向かった。

騎士科が訓練に使うトレーニングセンターから少し離れた場所。小さくてオンボロな、ごちんまりとした昔ながらの建物。それが、剣道部の道場だ。

「普通科の剣道部は格闘技センター半分くらい使ってるのになあ」
秋篠君がそうぼやくのも無理はない。

格闘技センターは本当に広い。
大学部や中等部と共用だけど、それでも下手なジムより施設が整っているんだ。

「しかたないよ」
未亜は言った。

「向こうは全国大会連続出場の強豪。こっちは趣味でやってる弱小部ってというのが、周りの評価だもん。それに」

「エーイツ！
ハーツ！」

道場の中からは気迫のこもった声が響いてくる。

「騎士剣道部がこうなっちゃった理由も、そういう所使っていたからってというのが、あるからねえ」

「どついうこと？」

「あの格闘技センターって、本当に最初は、騎士科の剣道道場を中心として建てられたんだよ」

未亜は言った。

「普通課の剣道部や、柔道部が隅っこで小さくなってやってるしかなかった。んで、つけあがったんだと思うけど……ある日、規模と実績を笠にした騎士科の生徒達が部活中にふざけて剣振り回して」

未亜はため息と一緒に吐き出すような口調になった。

「普通科の生徒、三人死んだんだよ」

「三人も？」

「よく手入れしてないスタンブレード振り回して、柄の部分から刀身がすっぽ抜けたんだって」

「スタンブレードの規格と運用が強化された事件だよ」

秋篠が言った。

「スタンブレードの柄と刀身を一体型にすることが義務づけられたのは、この事件があつてからだ。事件そのものは、学校やメーカー巻き込んだ泥仕合の裁判が示談になつたのは10年以上たった去年のことだよ」

「そう。それで、騎士科の剣道部は1年活動停止。ふざけた挙げ句が死人出した不祥事が響いて、部の評価はがた落ち。栄光の後の後は」

未亜は手を斜め下に動かした。

「落ちるだけ」

「……」

「今の連中がこんなボロい所にいるのは、周りに騎士がいない環境を望んだからだよ。誰も巻き込まないように」

「ふうん？」

ハアッ！

フンッ！

気迫の声と共に、ハードラバー製のスタンブレードがぶつかり合う。

狭い道場の中は、何とも言えない熱気に包まれている。

私は、ちらりと羽山君と秋篠君を見た。

何だろう。

それまでと二人の雰囲気が違う。

顔が本当に引き締まって カッコイイ。

騎士としての何か、この熱気に目覚めさせられたんだろうか？

二人の体から、何だかオーラが放たれているようなそんな気さえする。

だけど

「ふうん？」

同じ騎士なのに、そういうのを全然感じさせない水瀬君がばやいた。

「こんなに動いて、お腹、空かないのかなあ」

「そういう問題じゃないと思うけど あっ」

未亜が私を軽く叩きながら言った。

「あそこあそこ！」

道場の一番奥。

今、防具に身を包んだ二人が剣を交えていた。

周りの人達と比べても、動きが段違いにいい。

まるで最初から打ち合わせでもしているのかと聞きたくなる位、

互いの攻撃を紙一重で交わり、交わされている。

「あれ、部長の月宮先輩と聖護院先輩だよ」

「……へえ？」

どっちがどっちだかわかんないけど、勝負は一瞬でついた……んだと思う。

片方のスタンプレードが脳天ギリギリで止められ、もう片方のスタンプレードの切っ先がのど元に突きつけられている。

「相打ち？」

「いや」

羽山君は言った。

「聖護院の突き技が先に入った」

そうなんだ。

「違うだろう。羽山」

秋篠君がそれを否定した。

「絶対、月宮先輩の一撃の方が先だ」

「そんなことはない」

「いや、絶対、月宮先輩だ」

……。

お互い、普段は仲いいけど、騎士としての何かが絡むとそうはい

かないらしい。

互いににらみ合いに近くなった所で、二人の手が同時に掴んだのは、

水瀬君の襟首だ。

「水瀬」

「どっちが先だった」

「……あんなの、相打ちだよ」

水瀬君は宙ぶらりんになったままで言った。

「実戦じゃ意味がない」

「意味が……ない？」

「実戦で大切なのは」

羽山君に降ろしてもらった水瀬君は言った。

「生き残ることだよ。あの場合、どっちが先で後でも、戦場じゃ共倒れは避けられない。一々差し違えていたら命がいくつあっても足りない」

「……なら、どうする？」

「本当に実力のある騎士同士っていうのは」

水瀬君は言った。

「相手の実力が自分と同等以上なら戦わないよ」

「なんだそれ」

「自分より強いのと戦わなければ、最強だから」

「納得できるか……おっ？」

気がつくのと、こちらに気づいたのだろう。防具の面をとった二人がこちらに向かって歩いてきた。

「……うわ。」

二人とも、びっくりするくらいの美人だ。

オレンジ色の髪。くりつとした猫のような瞳をした可愛らしい女性と、見るからに外人とおぼしき金髪の女性だ。

「久しぶりね。光信」

金髪の女性が、日本語で話しかけたのは羽山君だ。

「聖護院なんていうから、まさかと思ったが」

「相変わらず、鈴紀には弱み握られてるみたいね」

「うるせえ、ダイコン」

「っ！」

それまでの勝ち誇ったような口調はどこへやら、あからさまに力チンと来た。という顔の金髪の女子生徒が羽山君を睨んだ。

「少なくとも俺はイヤイヤ来てるんだ。ここで帰ってもいいんだぜ？」

「なら、帰んなさいよ」

「何？」

「鈴紀に言っておくわ。光信は使い物になりませんって」

「っ！」

「使いものにならない、負け犬に用はないの」

「言ってくれるじゃねえか……ダイコンの分際で」

「私にそんな口聞いて良いの？涼子さんとはメル友なんだけど？」

「よろしく頼む」

涼子さんの名前を出された羽山君は、ポンツと金髪の女子生徒の両肩に手を置いた。

「……節操のなさは相変わらずね」

休憩時間。

部員達が三々五々、思い思いの場所で休憩している。

「今度の大会は」

オレンジ色の髪をした女性が部長のつきみや・おうが月宮桜香先輩。

どこかで見たと思ったら、去年の生徒会副会長だった人だ。

「私達にとっても最後の大会だし、負けたくないのよね」

「就職絡んでるから？」

「え？ああ、私達」

月宮先輩が、金髪の副部長さん、聖護院エリカ先輩と軽く目配せした。

「大学進学組だから」

「へ？」

「騎士として仕事つても悪くないけど、もっと別なこともしたいのよ。出来れば一生、長く続ける仕事見つけたいし。エリカはエリカで家継がなくちゃいけないし」

「……あの旅館と教会か？」

「そう。女風呂除いた光信が逆さづりにされたあの尖塔、まだ残ってるわよ？」

「……勘弁してくれ。あれは鈴紀にそそのかされて」

「その気になる辺り、あんたって本当に単純よね。で？男子、任せたいわね？」

「負けてもいいんだらう？」

「ええ」

エリカは頷いた。

「無様に負けてきなさい。笑ってあげるから」

「くそっ……おい、水瀬、お前も参加しろ！」

「僕？ダメだよ」

水瀬は、ずっと視線を一カ所に向けたまま言った。

「魔法騎士は、そういうの、出ること禁止」

「ああ……」

桜香は、ポンツと手を打った。

「水瀬君だっけ？君、第四分隊なんだ」

「はい。だから、僕はダメです」

「残念だなあ」

エリカは言った。

「見るだけで、そのエロガキなんか比べ者にならない位、筋がよさそうなのに」

「エロガキって誰だよ……」

「光信、黙れ……どうしたの？」

水瀬は無言で開かれたドアを指さした。

そこには、他の部員と混じることもなく、一人だけ開かれたドアから差し込む光を浴びながらスタンブレードの手入れに熱中する女の子がいた。

銀髪を肩の辺りで切りそろえ、リボンを結んだまるで日本人形のような女の子は、剣と自分以外、この世に存在しないと云わんばかりの熱心さで手入れに没頭している。

「高原さんのこと？」

「高原？」

「たかはらひびき高原響。次期女子部長候補」

「……無理じゃないかな」

水瀬はぼつりと言った。

「あれじゃ」

「？」

「……おかしいなあ」

水瀬は首を傾げた。

「あの子……でも」

不意に、響が立ち上がると、スタンブレードを手を外に出た。

「ごめんなさい」

水瀬はそう言つと、その後を追った。

恋と魔法と妖剣と 第二話（前書き）

すみません。でっちの助六です。いろいろありまして断筆状態でしたが、第二話を作りましたのでお届けします。よかったら読んでください。

でっちの助六 拝

恋と魔法と妖剣と 第二話

道場を離れた響が歩いていく先には、小さな社がある。

明光学園の敷地に神社があることを知ったのは、その目立つ銀杏の林のせいだ。

銀杏を拾って生活の足しにしようと足を運んで以来、小さな社は幾度と無く水瀬の寢床として利用された過去がある。

銀杏の葉が色づき始めている。半ば青い葉を樹から奪い取る風は柔らかい。

風の匂いも、夏の盛りを過ぎ、物静かな優しさを含んでいる。

それ感じ取った水瀬は、ああ。もうすぐ秋だなあ。と、そんなことを思った。

響の歩き方は、相当、剣の訓練を受けた者独特のそれ。

後ろに対しても隙というものが無いと褒めてやりたいが、その中に水瀬はいなかった。

水瀬から見ると、どこか、まだぎこちないのだ。

10でいったら7が良いところ。

未完成さがその挙動に明らかに見て取れる。

ただ

「？」

水瀬は、何度となく、その歩みを見ながら首を傾げた。

自分は、あの子を過去に見たことがある？

覚えがない。

でも、何だろう？

どこかで見たような、この既視感は何だ？

地面に敷き詰められたような銀杏の葉を踏みしめながら歩いていった響は、不意に社の前で足を止めた。

そして、手にしていたスタンブレードを引き抜くと、何度も柄の握り具合を確かめていた。

柄を左に握っている。

どうやら、響は左利きらしい。

「？」

一瞬、追跡に気付かれたかと思ったが、どうやら違う。物音も立てずに銀杏の樹の影に隠れて気配を消した水瀬を、響は見つけることが出来ていないのは、こちらを見ない響の動きから明らかだ。

「何……してるの？あの子」

耳をそばだてた水瀬の耳に、響の呟く声が聞こえてくる。

「……今度こそ」

響は、スタンブレードを一度、鞘に戻すと社に手を合わせた。

「今度こそ、上手くいきますように」

「？」

一通りの祈りが終わったのか。

響はスタンブレードを鞘から抜いて振りかぶると、気合い一閃。

剣を振り下ろした。

「……」

残心の姿勢のまま、余韻に浸っているのか、ぴくりとも動かない

響は、スタンブレードを横に一凧ぎして再び鞘に戻した。

その間、ずっと響は瞑目したまま。

「……」

すっつ。

大きく息を吸い込んだ響は、

「やったあああっつっ!!」

突然、何度も飛び跳ねながら歓喜の声を上げた。

「完璧！パーペキだっつ!!」

それまでの剣士然とした態度はどこへやら。響は年頃の元気な女の子として、元気に飛び跳ねている。

その動きが不意に止まったのは、響が水瀬の存在に、その時初めて気付いたからだ。

「あっ」

凄まじく気まずいと言わんばかりに、凍り付いた響。

自分がやっと気付かれたと知った水瀬は、銀杏の影からこっそりと頭を下げた。

「こ……こんにちは。あの」

何とか、話を合わせようと、水瀬はおずおずと問いかけた。

「さっき……かけ声で上げていた」

「……」

わなわなと、体を震わせる響の顔は真っ赤だ。

「ア ストラッシュって……何？」

「っ!!」

響は、水瀬を突き飛ばすと、その場から逃げ出した。

「？」

「何してたんだ！」

水瀬が道場に戻ると、練習は再開されていた。

「お前が戻るまで、模擬戦お預けだったんだぞ!？」

あぐらを掻いた羽山が水瀬の襟首を掴むと、ヘッドロックして水瀬の頭をグリグリやり出した。

「痛い痛いっ！」

「こら光信！」

エリカが怒鳴る。

「暴力禁止！弱いものイジメしない！」

「こいつのどこが弱いヤツだ！」

羽山が怒鳴り返した。

「コイツは俺より強いぞ!？」

「ウソおっしやい！みつともない！」

「本当だって！」

口げんかが始まった羽山とエリカの間近で、水瀬は自分に突き刺さる殺意に気付いた。

道場の端で正座する響だ。

凄まじいほどの眼光でこちらを睨み付けている。

眼光を物質化することが出来れば、凄まじいモノが飛んでくるだろうことは請け合いだ。

水瀬は、あのアバン　トラッシュとかいうのは、見てはいけない何か、願掛けやおまじないの類だったのかなあ。と、全く見当違いのことを考えたりもしたが、考えた所で飛んでくる殺気をどうすることが出来るわけでもない。

どうも、敵を作ったらしい。

それだけははっきりとわかった。

「じゃあ、いいわよ」

エリカが軽く咳払いをして言った。

「その子の実力、見てあげようじゃない」

「ノド痛てえ……バカダイコンが。後でほえ面かくな？」

「あの……羽山君？何だか、歓迎したくない事態になったご様子ですが？」

「喜べ水瀬」

羽山は怒り心頭の顔で言った。

「もし、万一、例外的に、無様に負けるようなバカやらかしたら……」

……

「したら？」

「俺からぶん殴られる特典付きだ」

「いりません」

「ラーメンと餃子、卒業するまで俺におごるというオプションまでついているんだ。どうだ？とつてもお得だろう？」

「羽山君……頭、大丈夫？」

ガンツ！

「痛いっ！」

「ぐちゃぐちゃ言わずにやってこい！俺の面子潰したらブツ殺すぞ！？」

「理不尽だなあ……」

「うるせえ！ダイコンっ！剣貸せ剣っ！」

「ダイコンダイコンうるさいのよ！この単細胞！」

エリカは羽山に怒鳴ると、後輩達を振り返った。

「高原っ！」

「はいっ！？」

びっくりした顔をした響が、自分を指さした。

「わ、私ですか？」

「ちよっと　その子の相手してあげて」

「で、ですけど私、素人の、しかも女の子相手に剣振るうのはちよ

つと……」

「心配するな」羽山は言った。

「コイツはこれでも男だ」

「……え？」

「見てみるか？」

羽山は水瀬のズボンに手をかけた。

「アレ丸出しにしてやれば、嫌でもわかるだろ？」

「やめてエッチ！」

「……ホント」

正座したエリカが冷たい視線を羽山に投げつける。

「たいした博愛主義ね」

「だからといって」

エリカのスタンプブレードをマトモに脳天にくらった羽山は、タンコブにタオルを当てながら抗議した。

「これはないだろう？」

「……女だけじゃなくて、男まで対象とは」

「んなわけあるか。俺は涼子さん一筋だ」

「よく言っつわよ。ズボンに手をかけた時のあの動きは手慣れていたわ」

「……同人誌の読み過ぎだ」

そんな二人の前。

道場の中央でスタンプブレードを手に対峙するのは、水瀬と響だ。

互いに一礼すると、間合いを取った。

「……あのね？」

下段の構えを取る水瀬が、おずおずと訊ねた。

「さっきのこと……怒ってるの？」

「試合中に」

響は冷たい表情のまま、剣を下段にしっかりと構えた。
「相手に話しかけるのは、ルール違反です」

「……そう」

水瀬は、響の構えを見て、うずうずしていた。
筋がいいのは間違いない。
だが、構えがなっていない。
力が無駄にかかっている。これではダメだ。
だけど……

何だろう。

水瀬は、また、首を傾げた。

僕は、この子とどこかで会っているの？

この既視感は、何？

高原響

出会った覚えはない。

親戚なはずはないし……

「問答無用　　行きますよ？」

すっ。

膝が曲がり、腰が低くなる。

響の持つスタンブレードが下段からゆっくりと動いた。

刃を横に寝かせ、まっすぐに伸ばされた手の上に剣の嶺が乗る。

「お、おい？なんだアレ」

「……………」

エリカは首を左右に振った。

「あんなの……………見たことない」

恐ろしく奇妙な構えを前に、

「……………へ？」

水瀬はきよとん。とした顔で動きを止めた。

「その……………構えは……………」

「覚悟っ！」

気迫と共に動いた響は、呆然としたままの水瀬に容赦なく襲いかかった。

グシャッ！

ドンッ！

「この馬鹿野郎っ！」

「高原っ！」

「医者よ医者っ！」

……………

……………

……………

一体、何が起きたのかは考えたくない。

ただ、水瀬は、自分が夢を見ていることは、はっきり自覚してい

た。

でなければ、この人が僕の前にいるはずがない。

水瀬の夢。

それは、水瀬の過去というには近く、思い出というには血なまぐさい話だ。

今から約2年前。

国連軍から“ホテル・ライン”と呼ばれていた最前線でのこと。丁度、魔族との戦争において、“大反攻”作戦が実行に移された。当時の水瀬が所属していた部隊は、警視庁騎士警備部と共同作戦をとっていた。

連日の戦闘の中で、水瀬はある人物を出会った。

背の高い、ニヒルな顔立ち。

語る言葉も皮肉めいた物言いが多く、軍服もラフに着こなす、警官とは思えないほどやさぐれた人物。

いつもタバコを手放さない。

タバコの匂いの中に、妖魔特有の血のにおいがプンプンする、危険な人物。

警視庁の高原警部だと、名前は人づてに知った。

思春期の男の子が、不良に憧れるように、水瀬もまた、彼に憧れた。

水瀬は、彼になりたいと、本気で思った。

彼の歩き方や仕草。

そのしゃべり方。

ちよっとしたことまで、何とかマネようと、無駄な努力をした。

そんな水瀬が、一つだけマネ出来ないことがあった。

タバコだ。

どうやって火をつけているのか。

水瀬は、それがどうしてもわからなかった。

警官達の忘れ物から盗んだタバコを一本、こっそり物陰で口にくわえ、火をつけても、タバコの端が焦げるだけでどうしても火がつかない。

警部は格好良くタバコを吸っているのに、どうして？

すっかり、タバコに熱中していた水瀬が、自分の前に誰か立っているのに気付いたのは、その時だった。

高い背が日の光のほとんどもを水瀬から奪う。

不意に、あたりにタバコの匂いが立ちこめた。

「？」

逆光で顔が見えない。

まぶしそうに、水瀬が上を見上げた時、

「くわえたまま、息を吸え」

声は重いが、どこか愉快さをかみ殺したような、人をバカにしたような声でした。

水瀬は、それが誰の声か知っていた。

「あ……あの」

水瀬は、本気で気まづく思った。

自分を見下ろしているのは、高原警部だった。

別に怒っているようには見えない。

どうやら面白がられている。
それだけはわかった。

「口にくわえて」

高原警部は、もう一度そう言っていると、ポケットからタバコを取りだし、口にくわえた。

「息を吸え」

水瀬は言われたとおりに息を吸った。

火をつける前のタバコ独特の匂いと、焦げた先端の匂いが混じったものが、水瀬の気道に入り込んでくる。

「そのまま」

ポケットから取り出したジッポの火が、水瀬のタバコの先端に火をつけた。

生まれて初めて吸ったタバコの煙が、肺の中へすぐに飛び込んでくる。

ゲホッ！

水瀬は激しく咳き込むと、口元を抑えた。

頭がグラグラして気持ちが悪い。

こんなもの、何がいいんだろう。

指に挟んだタバコを前に、困惑する水瀬に、高原警部は言った。

「気持ち悪いだろう？」

「……はい」

「そのうち、慣れてくる。これが無しだと耐えられない位にな」

「ほ、本当ですか？」

「こんな気持ち悪いの？」

その言葉を、水瀬は口には出さなかった。

「娘からはやめるやめるの大不評だが……父親とタバコはワンセットだ」

「……はあ」

「そのうち慣れる。二十歳過ぎてからな？」と小さくウィンクした。

「それと、だ」

タバコをどうしたものか迷う水瀬に、高原警部は言った。

「ガキが警官の前でタバコ吸うとどうなるか、知っているか？」

「えっ？」

「こつだ」

ガンツ！

水瀬の脳天を高原警部のげんこつが直撃した。

「こつ！」

瞼の裏に星が飛んだ水瀬は、その痛みに思わず頭を抱えた。

悲鳴すら言葉にならない。

「わかったか？」

そう訊ねられても、水瀬は頷くのがやっとだ。

父親のげんこつより痛いものが、この世に存在するとは思わなかつたのが、水瀬の本音だ。

「人前で吸うのは二十歳過ぎてからだ

それ以下はバレないよ

うに吸え」

警官とは思えない一言を残して、高原警部は踵を返した。

「ああ。そうそう」

ピンツ

そんな音がして、高原警部の方角から、弧を描いて飛んできたものが、水瀬の頭に命中した。

痛くない。

すごく軽いものだ。

「？」

手に取ると、握りつぶされたタバコの空箱だった。

「捨てておけ」

理不尽だ。

その時は、そう思った。

だが、水瀬はその理不尽さが、何だかとても好きになった。

タバコは吸えなかったが、水瀬は高原警部を追い求めることはやめなかった。

……ああ。

あの人の得意技も、平突きだったなあ……。

左利きで、突き技の鋭さはすごいものがあつたっけ。

……

意識がはつきりしてきた。

体が妙に痛い。

どこかケガしているな。

体の感覚が戻るのを感じながら、水瀬の意識は、夢から遠ざかっていった。

恋と魔法と妖剣と 第三話

桜井美奈子の日記より

それからは大騒ぎだった。

水瀬君の体を半ば貫通したスタンブレードを、誰もどうやって抜いていいかさえわかんない。

秋篠君と羽山君が、聖護院先輩からサラシをひったくって傷口を止血。

その間に、保険医の西桜寺先生が呼ばれた。

西桜寺先生は、今年の春に保険医になったばかりの人。

お姉さん系のおっとりとした美人で、校内でも一二を争うだろうとさえ囁かれる巨乳の持ち主。

その先生が、真っ青になった聖護院先輩に抱きかかえられて道場に飛び込んできたのは、博雅君と羽山君が、スタンブレードを抜くかどうかで口論の一步手前になった時。

「もう、お茶が冷めちゃうじゃない　あらあら。悠理君、スゴいことになっちゃったわねえ」

「先生っ！」

「こんなことで、悠理君が死にはしないわよお」

刀が突き刺さった人の前でそんなこという先生、初めて見た私は絶句するしかない。

「ほら　いいから抜いて」

先生は、手にしていた、閉じられた扇子をピラピラ動かして羽山君に言った。

「治癒魔法かけたいけど、邪魔だから」

「しかし」

博雅君が心配したのも無理はない。

「内臓　特に肺か心臓に傷がついていたら」

「それでも直すのが」

先生は、その巨乳……じゃない。白衣につけられた金色の飾りを指さした。

療法魔導師の徽章。

つまり、この先生は治癒魔法の使える魔導師だつてこと。

「私のお仕事なの」

「しくじつても、俺のせいだと言わないで下さいよ?」

「大丈夫よお」

西桜寺先生はにっこり笑つて言った。

「業務上過失致死で処理してあげる」

すぐに行われた治癒魔法による治療は、治癒魔法が使われるのを始めて見た私にとっては、「えっ!?!」とびっくりするくらい、あっさりと終わった。

「まあ、こんなものでしょう。ところで」

道場に横たわつたままの水瀬君。

その横にしゃがんでいた西桜寺先生は立ち上がりながら言った。

「どついつ騒ぎかしら?」

「あ……あの」

どつしよう。

聖護院先輩と月宮先輩が互いの顔を見合つた時だ。

「突き技禁止じゃなかったの? 高原さん?」

「えっ?」

先輩達がギョツとなった。

あなた、言ったの?

まさか!

聖護院先輩と月宮先輩のアイコンタクトが、先生を連れてきた聖護院先輩が、高原さんのことを、何も語っていないことを告げていた。

「 そんなにカワイイ殺気放っているのはあなただけですもの。 やったの、あなたでしよう? 」

皆の視線が集まる先。

そこには、試合開始のポジションにポツンと立っている高原さんの姿があつた。

高原さんは、静かに頷いた。

道場は、それからすぐに閉鎖され、部員達は帰宅を命じられた。

水瀬君は安静をとるために保健室で一晩過ごすという。

南雲先生に言わせれば、ベッドで眠れるんだからあいつも文句はないだろう。とのことだ。

傷も心配だけど、水瀬君が普段、どこで寝ているかの方が心配だ。

「 ったく、あの大馬鹿野郎っ! 」

私達は、居場所を求めて食堂に入ったけど、そこでドンツと乱暴に椅子に座つたのは羽山君だ。

「 あんな女子に殺されかかってどうするんだ! 」

場所を移動したせいだろうか。

少し、頭が冷静になってきた。

事件はまとめればこうだ。

高原さんの突き技が水瀬に命中。

問題はそこだ。

たかが突き技。

それだけじゃない。

否、それでは済まなかつたんだ。

スタンブレードの切っ先は、水瀬の体に突き刺さつた。

練習中の事故。

形はそうだろうけど……。

「 いくらなんでも、たかが突き技だぞ? それをあのバカ、西桜寺先

生が駆けつけてくれたことと、テムエのゴキブリ並の生命力がなかったらあの世生きとは何事だ！」

「……まあ、そう言うな羽山」

おごりだ。と、博雅君がお茶を持ってきてくれた。

「あの突き技は凄まじいものがあつた。俺でも避けられた自信はない」

「俺が賭けで負けた方もすさまじいぞ」

羽山はカップを受け取ると、一息に中身を飲み干した。

「……なあ」

「ん？」

「水瀬……大丈夫かな」

「ふっ……心配なら最初からそう言え」

「……ちっ」

「心臓には命中していない。あいつはあいつで、無意識に避けたんだろう」

「もみ消しに苦労するだろうな。この件は」

「……ああ」

博雅君は、羽山君の真向かいに座ると、緑茶の入ったカップに口をつけた。

「学校側としても不祥事だ。何しろ、スタンブレードの突き技は原則禁止。しかもあの子、切っ先を潰した標準タイプを使っていなかった。公になれば、あの子の監督責任まで含めて、学校が責任を問われることは避けられない……」

「しかし」

羽山君は、缶を弄びながら言った。

「あの子、どういうことだ？切っ先が尖ったスタンブレードなんてどこで手に入れたんだ？」

「気付かなかつたか？」

「何を」

「あの子……ブレードに細工していたぞ」

「細工？」

「ブレード切っ先に事故防止の保護キャップを着用する義務は知っているだろう？あの子、そのキャップの下をヤスリか何かで削っていたんだ」

「まさか！」

「間違いない。殺傷力を持つように細工していたんだよ　あれと同じ事やったら、校則違反所じゃない。それを知らないはずはないんだ。この学校の生徒として」

「おい、博雅」

「ん？」

「そろそろ、ダイコン達の締め上げが終わる頃だ。話を聞きに行かないか？」

「……そうだな」

博雅君の視線が、私達にむいた。

「私もいい？」

「一緒に来るか？」

博雅君の視線は、その確認だ。

私はそれを察して、自分から名乗りを上げた。

「友達、あんな目に遭わせてくれた理由^{ワケ}、納得のいくように説明して欲しいもの」

「……ダメよ」

道場の中では先生達が高原さんの取り調べをしているらしい。

丁度、道場から出てきた聖護院先輩に状況を尋ねたけど、先輩は肩をすくめた。

「あの子、頑固だから。あそこまでいけば褒めるしかない」

「何も言わないのか？」

「殺意すら否定しないんだもの」

「はあっ?」

「ど、どういうことですか?」

私は思わず訊ねた。

「高原さん、水瀬君を殺すつもりだった!?!」

「怒鳴ろうが胸ぐら掴もうが、とにかく、あの子、どうしてあんなことしたのか、その理由を語ろうとしないのよ。“アイツが悪い”の一点張りだ」

「アイツが……悪い?」

「ねえ、光信。高原と水瀬君って、何か関係が?」

「んなこと、俺が知るか」

羽山君は肩をすくめた。

「そういうことは、信楽の方が詳しいだろう?どうだ?」

「いやあ……」

美亜が首を横に振った。

「水瀬君にたぶらかされたとか、そういうのではないと思うよ?水瀬君、年上好みだし」

「……そう」

「だが、殺すとなれば余程のことだぞ?普通」

「だから、心配なのよ」

聖護院先輩は言った。

「この部にとつても、あの子は必要なの。いっちゃ悪いけど、つまらない騒ぎで失いたくないのよ。その……水瀬君とどういっさいざいざがあつたかは知らないけど」

「エリカ」

道場から月宮先輩が出てきた。

「1年の桜井さんって人、知ってる?」

「えっ?」

「南雲先生が呼んでこいって。まだ校内にいるはずだから」

「つまり、尋問ってワケですか？」

「そうのことだ」

南雲先生は苦い顔で頷いた。

「相手が男で、ここが戦場ならいくらでも吐かせる方法は知っているが。相手は女子だからなあ」

「それはちよつと……」

私は道場の真ん中に正座したまま、微動だにしない高原さんを見た。

ピンツと伸びた背筋が、本当に道場という場所に似合っている。

肩の所で切りそろえられた銀色の髪に、白い肌。

その小柄な体格もあって、何となく水瀬君に似ているなど、そう思わせる雰囲気は高原さんは持っている。

そんな子に、南雲先生の言う「吐かせる方法」を使われるのは、同性として、いや、人間として避けたいところだ。

「このままだと、西桜寺先生の尋問になる」

「それでいいじゃないですか」

「どうも……それもマズいんだ」

「はい？」

「先生の言う尋問は　いや。そんなことはどうでもいい。とにかくお前、高原を説得して、理由を聞き出してくれ」

「と言われても」

「聞いてくれたら」

南雲先生は、周囲を見回すと、その巨体をかがめて私に小声で言った。

「美亜の掴んでいるお前絡みの弱み。証拠を処分させるが」

「やります」

……とはいえ。

「どうしたものかしら」

それが、本音だ。

まるで座禅でもしているかのように目をつむる高原さん。
交渉の余地があると思えない。

第一、水瀬君と高原さんって、どういう関係なんだろう？
道場で対峙した時、水瀬君は妙に遠慮がちだったし……。

……ん？

……そういえば、水瀬君、変なこと言っていたな。

「さっきのこと……怒ってるの？」

たしか、水瀬君はそう言っていた。

さっきのこと？

そう。

水瀬君は、高原さんの何かを見た。

高原さんは、それを怒っている。

じゃあ、何が？

……答えると思えないけどなあ。

私は、自信ないけど、高原さんの前に座って、訊ねた。

「高原さん」

「……」

「水瀬君に、何を見られたの？」

……あつ。

反応があった。

高原さんの閉じられた目が開いた。

だけど、高原さんは私と視線を合わせようとしない。

まだ、心を開いてくれない証拠だ。

「誰にも言わない。女の子として恥ずかしい所、見られたんだ」

「……」

カマをかけたけど、乗ってこない。

でも、それ以外は考えられない。

「誰にも言えないようなこと、水瀬君に見られた。だから、あんなことをしたんだ」

「……」

「……そういうことが」

「……」

「後でいいけど、私には本音を教えてね？誰にも言わない。守秘義務は守るのが私のポリシーだから」

「……」

「これから先は、あくまで個人的興味なんだけど」

断っておいて、私は訊ねた。

「どんな気分？人を殺すのって」

「……」

「あと一歩で、人殺しになるところだったんでしょう？楽しい？人殺すのって」

「……」

「お父さんとお母さん、悲しむと思うけどなあ。娘が人殺しじゃあ」

「……」

「お父さん達に、なんて報告するの？あなたの娘は立派に人を殺しました？」

「……」

「……」

しばらくの沈黙の後、高原さんはぽつりと言った。

「……ない」

「えっ？」

「二人とも、もういない」

「……」

「お父さんは、戦争で死んだ。お母さんはとっくの昔に死んでいる」

「……」

「ごめんなさい。」

そう言いかけて、私は語気を強めた。

「だったら、どうしてお父さんやお母さんに顔向け出来ない、人殺しなんてマネしたの!」

「殺さない方が、余程私のハジだ!」

私に誘われるように、高原さんが怒鳴った。

「あんな所、私の代わりに見られたら、逆にあなたが殺していたはずだ!」

ハッ!となつた高原さんは、恥ずかしそうに顔を真っ赤にして黙り込んでしまった。

「……わかった」

私は言った。

「あなたが恥ずかしいと思う何かを水瀬君がのぞいてしまった。あなたは女としての羞恥心から、水瀬君を殺そうとした……間違っていないわね?これで報告するから、間違いがあるなら、今のうちに言つて」

「……」

「……ないわね?」

「あのね?」

グイッ。

私は高原さんの胸ぐらを掴み上げた。

「私は一般人だし、人を殺す度胸も覚悟もない。騎士でなくても、人めがけてこんなことしたことない。ましてこの先どうすればいいか、わかんない。でもね?」

そう。

私は一般人。

そして、高原さんは戦闘人種たる騎士だ。

一般人が騎士の胸ぐらを掴んで無事で済むはずがない。

それがわかる高原さんが、びつくりした顔を浮かべている。

私は、そんな高原さんに言った。

「友達殺しかけてくれた相手に、ごめんなさいもない、そんな態度

とられると腹が立つ。それだけは覚えておいて

言うだけ言うと、私は呆然とする高原さんを突き飛ばして道場を出た。

恋と魔法と妖剣と 第四話

「大丈夫？」

「……うん」

保健室にお見舞いに行ったら、水瀬君はベッドでうつうつとしていた。

何でも、先生にご飯をもらってお腹一杯なんだそうだ。

「ご飯、食べられるなら大丈夫そうだね」

「ほら……」

水瀬君は周りを見回すと、小声で言った。

「桜井さんや、綾乃ちゃん相手に鍛えているから」

「……どういう意味よ」

思わず出た苦笑。でも、おかげで重い空気が吹き飛んだ。

こういう配慮とウィットが出る所、水瀬君ってスゴいんだよね。

「ところでさ」

「何？」

「高原さんに……何したの？」

「うーん」

何故か、水瀬君はそこで考え込んだ。

「よくわかんないんだ」

「わかんない？高原さんは、とっても恥ずかしい姿を見られたって
言ってたけど」

「……桜井さん？」

「うん」

「アバン トラッシュユって何？」

「は？何それ？」

「高原さんは、そう叫びながらスタンブレード振り回して、上手く
できたって喜んでたんだよ。剣の技なのかなあ」

「それなら、水瀬君の方が専門でしょう？私に聞かれても困るわ？」

「うん……でも、聞いたことがないんだ。何かの真言かお祈りかも知れないし」

「……どっちにしても、あとで調べてみましょう？」

「ありがとう……僕、もう寝ちゃうけど、いい？」

「宿題は？」

「明日見せて」

「起きなさい」

水瀬君、本当に頭がいいクセに、どうしてもああも怠けたがるんだろ。

先生に机を借りて一緒に宿題を終わらせたら、もう下校時刻。

水瀬君は、“久しぶりにベッドで寝たい”と言って、宿題が終わるなりベッドに潜り込んだじゃうし……ホント、そういう所はコドモなんだよね。

まあ……そういう所も含めて……好きなだけぞ。

帰り道、今日が予備校の日だと気付いて慌てて道を変える。

商店街を抜けようとして、高原さんの姿を見た。

ショーウィンドーをじっと眺めていた高原さんは、そのままお店の中へ入っていった。

何だろう。

素知らぬ顔をしてお店に近づく。

……あれ？

じじって。

そうだ。

ここは 葉月商店街のゴミ売り屋とまで呼ばれる、古道具屋。入り口には私がまた保育園に通っていた頃から起きっぱなしの狸のでっかい置物があるし、中だつてがらくたや偽物だと子供でもわかる、いかがわしいものばかりを売っている、いわば“まがい物屋”だ。

そんな中に高原さんが入っていったけど どうしたんだろう。

……あ、いけない。

予備校の時間、ぎりぎりだったんだっけ。

私は、高原さんは気になったけど、その場を後にした。

そして、問題が起きたのは、その晩のことだった。

私が理沙さんに呼び出されたのは学校に行く直前のこと。

学校は何とかするから！と切羽詰まった拳げ句、今からパトカーで迎えに行くといい出した理沙さんを説得して私が向かったのは葉月の警察署。

普通なら絶対に関わりたくない所だと思う。

一生で縁があるとしたら免許証の更新だけでいい所だと、私は少なくともそう思う。

ウチからだど、自転車で10分ほど。大通りを抜けてコンビニの信号を曲がった先にある建物で。

「……ん？」

私は、信号の所で自転車を止めた。

どうしたんだろう。警察署のあたりが騒がしい。

何だかテレビ局のカメラや報道関係の車が列を作っている。

出かけてくる前にテレビを見ておけばよかったと後悔しても始まらない。

私は知らん顔して警察署に向かって自転車を押し始めた。

いくら何でも、警察署を全部閉鎖することも出来ないだろう。

署の敷地へは、びっくりするほスムーズに入ることが出来た。

駐輪場に自転車を止めて入り口に立つ警察官の人達に挨拶をする。

あれ？

私は二人の顔を見て首をかしげた。

公安部に所属する公安騎士の木村さんと原さんだった。

ある事件で顔見知りになった二人が、防弾チョッキにシールド、

そしてスタンプブレードを装備して、緊張しきった顔で頷いてくれた。

何かあったのか聞きたかったけど、二人のあまりに真剣な顔を見るだけで声をかけることは出来なかった。

私は眼で“通っていいですか？”そう訊ねた。

二人は無言で小さく頷くだけ。

私は二人の間をすり抜けるようにして署の中へ入った。

入ってすぐが交通課で、角に経理課がある。いつもの景色だけど、私を出迎えてくれたのは、すごい罵声だった。

誰かが交通課の前で警察官ともみ合いになっている。

禿頭のお爺さん。

頭に包帯を巻いてすごい剣幕で怒っている。

それを警察官が4人がかりで羽交い締めにして、どこかへ連れて行くところだった。

びっくりしながら、交通課の横を抜けて、階段を登る。

いろんなポスターが貼られた曲がりくねった二階。

その一番奥が刑事課だ。

「ああ、よく来てくれたわね」

理沙さんは明らかに寝不足気味な顔で私を出迎えてくれた。

私も何度来たか忘れた程で、おかげで刑事さん達は全員、顔見知りだ。

「何かあつたんですか？」

「報道？」

「それもあるんですけどね？」

私は、一階での騒ぎを話した。

「ああ」

理沙さんは缶コーヒーを私の前に置くと言った。

「源さんね」

「源さん？」

「原町通りの“ゴミ売り屋”ってわかる？」

「入ったことはないですけど……知ってます」

「あそこに昨日、泥棒が入ったんだって」

「泥棒？」

「うん。しかも女の子」

「……あんな所に女の子が？」

「おかしいでしょう？」

理沙さんはクスクス笑いながらデスクに腰を下ろした。

「あんなボロ屋で何盗めっていうのよ。しかも、女の子によ？」

「でも、本当に泥棒が入ったんでしょう？」

「源さんが言うには、ほつかむりした女の子が二階の窓から忍び込んで商品を盗もつとしたから、とっ捕まえようとしたけど？頭を殴られて逃げられたとか」

「……そういえば、あのお爺さん、頭に包帯巻いていましたね」

「ちよつとしたタンコブをおおげさにしているだけよ。血が出てるなんて言うから、署員が救急隊手配するっていったら、必要ない！なんて言い張るからおかしい、傷見せろって言ったら、それだけで押し問答。包帯に赤いのが滲んでいるのに傷がないから、どこ怪我

したって聞いたたら、お前等がモタモタしてる間に出血は止まった！
だつて」

「はあ？」

「赤インクか何か、包帯に塗りつけただけよ」

「それ……詐欺？」

「詐欺と窃盗と、それからいろんな余罪で人生の半分を刑務所で過
ごした人だからねえ……別名、“こそ泥の源”、“ネズミの源”……
小物のクセに一端の面した、私から言わせれば“売れない芸人”。
かわいいものよ」

「何盗まれたんですか？」

「千両箱だつて」

「はあ？」

「慶長小判が詰まった千両箱、千枚入りで時価1億だつて」

「い、一億は、スゴいですね」

私がつくりすると、理沙さんは大笑いした。

「だから、あいつは小物だつて言われるの！」

「えっ？」

「いい？慶長小判つて下手すれば一枚で百万はするわよ？」

「ひ、百万！？」

私は時代劇でよく放り投げられている小判がそんなにするとは思
わなくて思わず聞き返してしまった。

「そ、そんなに高いんですか！？」

「当然」

理沙さんはニヤリと笑った。

「まあ？時代によって価値は違うけどね……それが千枚でどうして
一億で済むのよ。おかしいでしょ？」

「あ……あれ？」

「だいたい、あのゴミの中に小判がざつくりの千両箱があるなんて
言い張るだけでウソだつての。被害を大げさにいって目立ちたいん
でしょ？だいたい、千両箱があんな所にあるなら、誰より先に私が

もらいに行ってるわよ」

「そ、それはそれで……」

「あの怪我だって、どうせすっ転んだだけでしょうし。気にする必要ないわ。こっちはあんな奴の相手してるヒマはないんだから」

「そう言えば……あのマスコミの列は何ですか？」

「テレビ、見てないの？」

「ごめんなさい。まだ」

「……そう」

理沙さんは頷いた。

「昨晚、警察署で殺しがあったのよ」

「殺人？」

「そう。殺されたのは現職の公安騎士が4人」

「……」

「ばつさりと道場で斬り殺された。手口からして、騎士なのは間違いない」

「目撃者は？」

「一人いたんだけど、出血がひどくてね。もうあの世行きよ」

「……むう」

思わずため息というか、お腹の中の空気を吐き出した。

こんな所で殺人事件なんて。

「一応、容疑者は捕まえたんだけどさあ」

「へっ？」

「……」

容疑者が逮捕されているなら、もう事件は解決だ。

「何だ。犯人が捕まっただけでも、よかったじゃないですか」

「それが、問題があるのね？」

理沙さんは言った。

「問題？」

「そう。裁判になった時、裁判官の席に私がいないと、厄介なことになる問題なのよ」

「は？」

「普通、犯人が誰でも問答無用で死刑にして、それで世の中回るのにおかしいと思わない？」

「……いや、それはマズん？」

理沙さんは、口は悪いけど警察官としては優秀だ。

その理沙さんがまるでゴミのように言っている奴なんて、私は一人しか知らない。

「……まさか」

「わかる？」

「でも、その時」

「お腹すいてたからさあ」

理沙さんはポリポリと頭を掻いた。

「呼び出してメシおごれって、丁度、事件が起きたときにはそこに座っていたのよ」

理沙さんは私の座っている椅子を指さした。

「おかしいでしょ？事件があったときに現場にいなかったなんて。

現場にいないで事件を起こせる奇妙奇天烈な椿事をやってのける精神的異常者は、あいつしかいないのにねえ」

「おかしいのは」

私は続きを飲み込み、席を立った。

「彼、どこにいるんです？」

毛布にくるまって眠っていたのは、小柄な女の子。

銀色の髪が毛布から零れ、無邪気な寝顔は見ただけで不思議と癒される。

普通ならそうだろう。

ここが、留置場でなければ。

「起きろ」

牢屋の鍵を開けさせた理沙さんは、毛布にくるまった女の子を平気で踏みつけた。

「ふぎやつ!？」

ネコのよような悲鳴を上げ、女の子が飛び起きた。

「？」

何が起きたかわからない。と言う顔で、女の子がこっちを見ている。

「……あれ？」

私の顔を見た女の子は、私が誰かわかったようだ。

「ど、どうしたの？」

「どうしたもこうしたも」

私は呆れながら言うしかなかった。

「何してるのよ　水瀬君」

留置場の女の子　つまり、水瀬君が言うにはこういうことになる。

昨夜、理沙さんから夜食を持ってこいと言われ、弁当を作って持って行った。

食べ終わってなお物足りないと言い張る理沙さんに、近くのファミレスへ連行されそうになって、そこで事件が発生した。

だから、僕は無関係だというのが水瀬君の主張。

これに対して、事件の後に知らん顔して私に弁当を持ってきたとしても時間的には成立するし、水瀬君が犯人であることの前には、時間的事実なんて大した問題ではないと言い張る理沙さん。

「理不尽だつて、号泣する水瀬君の気持ちもわかるけど」

私は水瀬君に言った。

「どうして人殺しなんてしたの？」

「僕じゃないよおっ！」

「じゃあ、誰なの？」

「知らないよ！どうして僕が警官殺しなんてしなくちゃいけないの！？」

「鬱憤晴らしとか」

「そんなことで人殺しなんてしないもん！」

「猟奇的な性向とか？」

「うわああん！桜井さんの中の普段の僕って、どう写ってるの！？」

「金目当て」

「理沙さんナイス」

「それで警察署狙うって、僕はどれ程の破滅願望持ってるの！？」
「違うの？」

「普通に考えてありえないでしょ？どうしてもなら、ススキノやミナミとか、遠い所狙うよ！あのヘンの骨付き肉二、三人斬り殺して刀の鑑定すれば謝礼はもらえるし、ローレックスの腕時計やブランドモノのネクタイに宝石類は故買屋に転売できるし」

「ルート教えなさい」と、真顔で迫る理沙さん。

「絶対教えない！」言い張る水瀬君。

「これ以上、容疑増やしたくないもん！」

「こっちは冗談だったの……」

理沙さんは肩をすくめた。

「すぐ本気になるから私にイジられるってのに……」

「冗談なの？」

「最初はね」

「……後は？」

「いろいろ、聞きたいことが増えたから、ここから生きて出られると思わないでね？」

「うわああんっ！理沙さんズルいっ！」

それは違う。

水瀬君がおしゃべりで、ドジでマヌケなだけだよ。

でも……そういえば。

「聞き忘れてましたけど、理沙さん？」

「何？」

「どうして、相手が騎士だってわかるんですか？」

「殺されたのは公安騎士よ？しかも、4人をばつさり。道場前を通った警察官の話から、犯行時間はたったものの数分とかかっていない」

「数分？」

「道場の横に喫煙所があるの」

理沙さんは答えた。

「ここに行くためには、道場前の通路を通るしかない。でね？夜勤待機中の警察官がタバコ吸いに、道場を通りかかった。その時は、道場からかけ声がしていたし、竹刀を構える剣道衣姿が見えた」

「……待って下さい」

私は思わず理沙さんの言葉を止めた。

「何？」

「つまり、殺された公安騎士の方達って、剣道の格好してたんですか？」

「そう」

理沙さんは顔を暗くして頷いた。

「タバコを吸い終えた警察官が、部署に戻るためにもう一度道場の前を通るまで、つまり、最初に道場の中を覗いて、もう一度、道場の前を通りかかった　往復の時間は全部でいたい15分」

「確かですか？」

「この警察官の携帯電話の通話記録からはっきりしてる。

道場の前で着信があって、タバコを吸いながら話し終えたのがきっかり10分。

そこからタバコをもう一本ふかせるのに大体3分から4分。

これは本人にタバコを吸わせて測定しているから確か」

「……喫煙所から道場前まで約1分」

「そう。そこで彼が立ち止まったのは、コンクリ吹きつけの通路に残されていた足跡」

「足跡？」

「そう。靴のサイズは27.5センチの足跡」

「なんでコンクリートの通路に足跡が……」

「言いかけて、私はその答えを自分から察した。」

「血痕……ですか？」

「正解。通路が暗くて、その警察官も最初は何だかわからなかった。ライターで照らしてみたら血痕だとわかった。で、道場の中を覗いてみたら」

「……」

「最初、防具や竹刀が赤い布の上に散乱していると思ったそうよ？規則に厳しい道場でこれはないだろうと、そう思ったんだけど、何か違う。何が？べったり床に残った血まみれの足跡が自分めがけて残されていること。つまり、赤い布は血の海だって気付いた」

「それで大騒ぎ」

「そう。すぐに仲間を呼んで 防具の中には人間の部品がそのまま入っていることがわかった。両足切り落とされた防具の中にいたのが、たった一人の生存者。もう手遅れだったわ。療法魔導師を呼ぼうとした時には」

「……」

「私が、なんで美奈子ちゃんを呼んだかは、これでわかったでしょう？」

「水瀬君を確保したのは」

「悪戯っぽい眼になった理沙さんに私は訊ねた。」

「私に協力させるためですか？」

「8割方、そうね」

「残り2割は？」

「私の趣味ね」

現場となった道場は状況を保護するために封鎖されているという。

「死体は片付けたけど、さすがに血の臭いがすごいわよ?」

「慣れてますよ」

私は皮肉で笑って見せたけど、上手く笑えたかはわからない。

「理沙さんのおかげで、鼻がバカになっちゃって」

「悪いわねえ」

「悪いと思ったら」

理沙さんに片手で首根っこを持ち上げられた水瀬君が恨めしそうに言った。

「少しは待遇改善してよお……」

「美奈子ちゃんの前に普通の男の子で現れたくないの?」

「へっ?」

「いいのよお?ヘンタイ男子扱いされたいなら、私はそれで」

「な、何するの?」

脅えた水瀬君に理沙さんは自身満々に言った。

「さあ?」

「う……う……」

こういう時、水瀬君が人と接するのが苦手だというのがよくわかる。

交渉が全然出来ないことは本人も自覚しているし、気にしているというけど、それならそれで慣れるように努力すべきだと思うんだけど……。

「楽しいことになるわよお?ね?美奈子ちゃん?」

「まあ」

私は笑顔で言ってあげた。

「水瀬君にとってヘンタイはデフォでついでにオプションですから」
「……」

冗談なのに、すっかりいじけた水瀬君をなだめすかして、私は道

場前の通路に立った。

確かに、血痕がべったりとついた足跡が残っている。だけど

何か、何かがおかしい。

「……………」

さすがに素手では触れられないけど、くつきりと人の血で作られた足跡だ。

「だけど……………」

「……………水瀬君」

「うん？」

「何か、おかしいと思わない？」

「何が？」

「こう……………足跡として、これはおかしいでしょう？」

「うん」

水瀬君は答えた。

「はつきりおかしい」

「そうよね……………」

小首をかしげた私は、ふと、通路を歩く警察官を見た。

「一步、二步……………」

靴痕も右と左で……………あれ？

「水瀬君」

「何？」

「これ……………」

私は訊ねた。

「歩幅、おかしくない？」

「気付いた？」

「うん……………こんな大きい足なのに、どうしてこんなに歩幅が短いのか……………」

「えっ？何かあった？」

私は理沙さんをお願いして、27・5センチの足をした人を探し

てもらった。

別室に用意した白い紙を敷き詰めた上を、靴墨をたっぷりつけた靴で歩いてもらう実験をするためだ。

丁度、刑事課の佐野さんという背の高い人が協力を申し出てくれた。

何度か紙の上を歩いてもらって、歩幅を調べる。

はつきり、現場に残された歩幅と比較して、幅が広い。

何度やっても同じだった。

「緊張している時に歩幅が短くなるはずはないわ」

別室から戻る途中、理沙さんは言う。

「理由がないもの」

そう。

犯人がなぜ、あんな短い歩幅で歩いたのか？

それがわからない。

犯行を誤魔化したいなら、靴痕を残すんじゃなくて隠すべきなのに
ああも何故、堂々と残したんだろう。

「そういえば、水瀬君は？」

「あそこ」

理沙さんが指さしたのは、道場の中。

血痕の前にしゃがみ込んだ水瀬君が何かをしている。

「どうしたの？」

「あ、終わった？」

水瀬君はしゃがみ込んだ姿勢のまま、私を見上げた。

「うん。どう考えても、ありえないのよ」

「何が？」

「歩幅が合わないのよ……で、何してたの？」

「うん。犯人像を考えていた」

「へえ？」

私は水瀬君の横にしゃがみ込んだ。

道場の板張りの床の上に残された血痕はもうどす黒くなっている。

この血を流した人の事を思うと、すこし辛い。

「それで？」

「うん」

「水瀬君は答えた」

「身長150センチ前後。女性。体重は45キロ前後。右利きで動きが特殊というか……よく訓練されているね」

「へ？」

私は眼が点になったまま、バカのように水瀬君を眺めた。

水瀬君はじつと血痕を眺めたまま、続けた。

「理由が知りたい？」

「う、うん」

「あのね？」

水瀬君は、手にしていた警察署と書かれたボールペンで血痕を突いた。

よく見ると、血痕にほんの少し、足跡が残っている。

「靴のサイズと比較して、体が軽すぎるんだよ」

「……え？」

「だから、血痕にこうも足跡が残る」

「ち、ちよつと待って。身長150センチで27.5センチの靴って、どんな人よ」

「だから」

水瀬君は私に向き直った。

「靴は誰かの履いているんだよ。はき慣れていない上にサイズが大ききから、こんな中途半端な踏み込みになる」

「踏み込み？」

「大きな靴を履いているから、踏み込みが普段と違っちゃう……うん。桜井さんにはちよつとわかんないよねえ」

「それは、騎士としての意見？」

「まあ、僕の意見、かな？」

「ふうん？体重はどうやって知ったの？」

「足跡から、踏み込む時の踏ん張り具合を見た。足がずるって動く幅が大体、僕と同じ位」

「……45キロ」

「どうしたの？自分のお腹つまんで」

「う、ううん？ちよっと……ダイエツトしようかなって……」

作り笑顔を浮かべ、私より、キロ軽い水瀬君から視線をそらせた。

まだ二桁行つてないから大丈夫！

そうよ。まだ何とかなるかもってというか、身長差あるし……。

あれ？

道場の入り口でさっきの刑事さんと話していた理沙さんが慌てた様子でこっちに走ってきた。

「どうしたの？」

「仕事が増えたわ」

「……まさか」

嫌な予感がした。

「へえ？」

水瀬君は立ち上がった。

「たった四人で済む話じゃないと思ったけど」

「ねえ」

不意に私は、水瀬君の顔が気になって、袖を引っ張った。

「何か、隠し事してない？」

「隠し事？」

「うん……あのね？私達に、何か大切なこと、言っていないはずよ？」

「そんなことない」

「ある」

「ないよ」

「あるったらある」

「ないっらないもん」

「あるったらあるったらある」

「ないったらないものはないもん」

「犯人はどんな人なの？」

「犯人は人間じゃないもん！」

あっ。

言った後に水瀬君は口を押さえたけど、どうやら私の勝ちだ。

「人間じゃ　　ない？」

「し、知らないもん」

「なんで隠すの」

「し、知らない」

「……美奈子ちゃん？実はこの前、この子ったらねえ」

「わーっ！わーっ！」

「　　しゃべれば黙る」

「……ううっ」

水瀬君は困った。という顔で言った。

「あのね？」

「今なら、本当の喋らないと射殺するおまけ付き」

「……ここに来るときからわかってたんだけど」

「何よ」

「ここ、魔素がスゴい残ってるの」

「魔素？」

「うん。ほら、妖魔や呪具から放たれているあれ」

「知ってるけど……ここ、警察署よ？」

「だから」

水瀬君は言った。

「犯人は呪具を使っているか、乗っ取られているかのどっちかなんだよ」

恋と魔法と妖剣と 第五話（前書き）

更新が遅くてごめんなさい！

恋と魔法と妖剣と 第五話

理沙さんに連れて行かれたのは、葉月市内だけど、そこで生まれ育った私でさえ生まれて初めて行った所。

電映通り。

かなり昔に通りの奥に映画館があつて、そこ目当てに人が集まった所が由来だと聞いたことがある。

今はもう映画館も何もなくて、ただの繁華街というか……まあ、よく知られた風俗街で、市内で殺人や暴力事件といえば大体、ここで起きる。

暴力団事務所を筆頭に、葉月市内で最も危険な連中のたまり場だから近づくなと子供の頃から言われている場所。

大抵、ここの近くを歩くだけで補導員に捕まるとさえ言われている。

こんな所に来たなんてことが知らただけで学校から何を言われるかわかったものじゃない。警察の車に乗せてもらっているとはいえ、制服を着てこなくて良かったと心底思った。そんな私の横では水瀬君がぼんやりと外の景色を眺めている。

「あんな所」

ハンドルを握る理沙さんは、タバコを吸いながら言った。

「コドモを連れて行くところじゃないんだけどね。まあ」

ミラーに写った私達の顔を見るその口元に苦笑が浮かんでいる。

「殺人現場よりはマシってヤツ？」

「そう……ですかね」

「水瀬君は別だけどね」

「なんで？」

不意に名前を呼ばれた水瀬君がえっ？という顔になって前をのぞ

き込んだ。

「いろいろ知り合いがいるんじゃないの？」

「それは内緒」

「ねえ、ヤクの売人知らない？」

「……何で僕に聞くの？」

「知り合いがいるんでしょ？」

「いないよ」

「本当に？」

心外。という顔で理沙さんはミラーをのぞいた。

「クスリは専門外」

「……君は一体、何を扱ってるのかな？」

「内緒」

「あっさり答えるな……最近、合成麻薬を扱う新勢力が都内で他のルート潰しにかかっているけど」

「知らない」

「押収した合成麻薬……かなりの成分が新タイプの魔法薬なのよね」

「知らないよ」

「4日前の山村組の件、あれ、キミでしょ？」

4日前。

「……そう言えば」

新聞の記事を思い出した。

「港の倉庫で麻薬の密売に絡んでいた2つの組の人達の死体が発見された。取引されていたはずの麻薬と数千万円のお金が行方不明になったって、あの件ですか？」

「そう。20人からが蜂の巣になって殺されたけど、主犯がこんな近くにいたとはねえ……」

「だから、僕知らないもん」

「売上は9千万だっけ？」

「5千万」

はっとなつた水瀬君が口を押さえたけどもう遅い。

つくづく思う。

世界のみんなが水瀬君ほど単純だったら、世界はとっても平和だろうなあって。

……勿論、私は御免だけど。

「何で金額知ってるの？」
「ぐいつ。」

私は水瀬君の口の中に両方の親指を突っ込んで左右に開いた。

「痛い痛いっ！」

「盗まれた金額は、警察でも把握してないって聞いたけど？」

「あの魔法薬は」

水瀬君は涙目になって白状した。

「近衛でもルートを追ってるんだよお……情報はいろいろと」

「キミも動いていると？」

「情報収集だけはね……」

手を離すと、水瀬君は口元を抑えながら言った。

「で？金額はどこで知ったの？」

「組のルートあたれば誰でも知れているよ」

「ふうん？あとで協力してもらおうよ？」

理沙さんは道ばたのコインパーキングに車を止めた。

「何しろ、犯人逮捕は市民の皆様のご協力があつてこそだからね」

「協力つて、どつという字を書くの？」

「いい質問ね」

理沙さんはニコリと微笑むとドアを開けた。

「強く制するつてところかしら？」

道は綺麗とは言えない。

通りのあちこちに山積みされたゴミにカラスと野良猫が顔を突っ込んでいるし、そうでなくてもヘンな人達があつちこつちに屯しているんだ。

サングラスにスーツ姿のやたら怖そうなお兄さん達が数人、タバコを吸いながらこつちを見ている。

見られているだけで逃げたい。

その視線を感じるだけで、警察官の理沙さんがいなかったら即座に逃げて当然だと思う。

それに

「何か……すっぱい匂いがする」

たまらずに口元を抑えた。

口元まで吐き気が登ってくるのは、緊張のせいだけじゃない。

何、この臭い。

空気が、何だかとっても吐き気を誘ってくれる。

「繁華街は初めて？」

水瀬君は平気そうな顔で理沙さんの後ろを歩くけど、私はもう、理沙さんの裾でも掴ませて欲しいくらいだ。

「あ、当たり前でしょう？」

「仕事で来たことあるかと思っていた」

「ないよ……」

私は怖いお兄さん達の存在を忘れるかのように下だけ見ながら歩いた。

そして、この臭いの原因をあやうく踏んづけずに済んだ。

うつつ。こんな所に吐かないでよ……踏んづけるところだったじゃない！

「こういう所って、殺人現場のたまり場みたいなものでしょ？」

「そ、それは……」

あれ？

考えてみればその通りだけど、私、今までこういう所で起きた事件って関わったことがない。

「私も考えてるのよ」

理沙さんが言った。

「探偵に相応しい事件だけを選びすぐってるの。優しいでしょ？」

「そりゃ……」

水瀬君は意地悪そうに言った。

「こんな所で起きた事件だもん。迷宮入りさせた方がいろいろ楽だもんね」

理沙さんに案内されたのは、繁華街の本当に裏手。

どぶ川に面した寂れた雑居ビルの裏通り。

“売り物件”と書かれた看板がビルの入り口に掛かっているし、通路はベニア板と金網で封鎖されている。

錆び付いたシャッターに張り付けられた張り紙はちぎれて変色しているから、かなりの間、買い手も付かないような物件なんだろうことはすぐにわかった。

裏通りはゴミの山。

割れた瓶や雑誌、元が何だったのかわかんない、得体の知れない物体が散乱して足の踏み場もない。

「こつちよ」

立ち入り禁止を示す警察の黄色いテープが張られているのは、その裏手にぼつかりと開いた閉鎖された建物への入り口。

割れたベニア板が床に倒れているのを踏みつけて中に入ると、さっきのすっぱい臭いと違う、別な臭いが容赦なく鼻を襲う。

錆びた鉄のような　　血の臭いだ。

本当は真っ暗なんだろう入り口から一歩中に入ると、広いフロアになっていた。

よく古い刑事ドラマで見えるような飲み屋らしいスツールや家具の残骸、そして室内に残る煌びやかな装飾が、かつてここが何だったかを教えてくれる。

今は、その暗闇から室内は久しぶりの光を与えられていた。

鑑識が照明を持ち込んで現場の撮影を続けている。

「……うわっ」

本来なら、女の子として眼を背けるべき光景なのに、何故か冷静に現場を見舞わず自分に驚きもしない。

そんな声を上げただけで現場をはっきり認識する方が先に動く。黒いスーツ姿の男が床に倒れている。

別な男はひっくり返ったソファに覆い被さるようにして倒れている。

柱に寄りかかるようにして倒れているのは、胸から上を失った、男の体の一部。

壁の向こうには、カーペットを掴んで目を見開いたまま死んでいる男がいた。

あちこちに血が飛び散った後が床といわず天井といわず残っている。

それだけじゃない。

切断された腕や足、指……そんな肉片がそこら中に転がっている。死体の肌の色からして死後半日は経過しているのは確かだ。

首を回して周りを見回すと、入り口の近くには、首を失った死体と、這いずった後がはっきり残るもう一体の死体があった。

死体は全部で10人……か。

かなり多い。

その半分以上が真っ二つに切り裂かれて、切断面から臓器を撒き散らした無残な姿をさらしている。

死因は出血死なのか、内臓破裂によるショック死なのか、ちよつと知りたいな。

……はあ。

気の毒だとかそう思う前に、私はそんなことを思い描くなんて……。

でも

理沙さんは、私と水瀬君に悲鳴を上げさせるためにここに連れてきたわけじゃない。

それだけは確かだ。

その期待に応えるためには、これでいいと思うしかない。

「どう見る？」

「……犯人は」

私は、死体を写真に収めている鑑識官が片膝を突きながら写真を収めているその床を指さした。

「バーだかキャバレーだか、どんな種類だったか知らないけど、とにかくいかがわしい飲み屋だったんだらう豪華な室内の丁度真ん中にあたる場所。」

埃みまれの白い大理石の床がそこにあった。

「そこに立った」

「足形は？」

水瀬君のその質問に、

「鑑識がとった。埃のおかげであっちこっちに残っている。それだけなら」

「ジロリ。」

理沙さんが睨んだのはなぜか水瀬君。

「世界で一番キミが疑わしくなるんだけどね」

「女の子の足形が出たの？」

水瀬君は別に驚きもせず聞き返した。

「そう」

腕組みしていた理沙さんは、ちょっと意外。という顔になった後、床に転がった死体を眺め、

「……キミがやったってわけじゃなさそうね」

「足形、出たんですか？」

「ええ。残念ながらキミより0.5センチ小さい」

「それが残念……なの？」

「残念よ。この後、君の足を削るって面倒くさい仕事しなくちゃいけないじゃない」

「理沙さん、それ滅茶苦茶」

「黙れ。……キミが犯人なら、ああいうのは、回収して売り飛ばしてるでしょ？」

理沙さんが指さしたのは、死体の手。

そこには拳銃が握られていた。

「その前に、ここまで派手にやらない」

水瀬君ははつきり答えた。

「こういう骨付き肉は金目のモノ持つてるからね」

水瀬君が拾い上げたのは、床に転がっていた男の腕。

スーツの袖と時計がそのままくっついていた。

「ローレックスのオイスターパペチュアル……金のブレスレットは18金……スーツはオーダーかな？いい素材使っている」

時計を外そうとして、理沙さんの視線に気付いた水瀬君は、残念そうにその腕を床に戻した。

「こういうの、奪い尽くした後に死体はゆっくり始末すればいいんだよ。僕なら、ここまでアシがつくようなヘマはしない」

「ホント……普段、何しているのか教えて欲しいわね。取調室行かない？」

「三角木馬とか、水責めの道具がある取調室なんて葉月署だけだよ……」

「素敵でしょ？鞭に竹刀に焼け火鉢もあるし、必要なら足に五寸釘刺して蠟燭つてのも」

「今度、あの部屋、写真にとってマスコミにリークしてやるんだから」

「いの一番で殺して下さいって言ってるのと同じだって気付きなさい」

「怖いなあ……」

「ありがと　それで？」

理沙さんは私に向き直った。

「美奈子ちゃん、犯人がそこに立ったって、どうしてわかったの？」

「死体の配置です」

「ん？」

「……前に、ウチの学校にある騎士科の模擬戦見学したことあるんです」

「それが？」

「あの時は水瀬君が複数の敵に囲まれて袋だたきにされるはずだったんだけど」

「……」

水瀬君を睨む理沙さんの視線は冷たい。

「キミ……学校でまで恨み買ってるの？」

「うつつ……いろいろあつたんだよ」

「瀬戸綾乃ちゃんの手作りのお弁当食べた後よね。男子生徒に訓練を理由に包囲されて」

「やられてごらんよ」

水瀬君はちよつと身震いした。

「あの肉食獣のような間合いの詰め方……みんな、ああいう方面でちゃんと訓練すれば、もつと……」

「成る程？このエロガキが天下の歌姫、瀬戸綾乃ちゃんの手作りのお弁当を……ねえ」

「オークシヨンにかけたら何十万で利くかしら？」

ちよつと、意地悪いけど、言つてやる。

どうせ私、お弁当作れないもん。

料理下手だもん。

綾乃ちゃんのように作れないもん。

いいもんね。

ふんだつ！

「数百万は固いわね。それ、転売した方がよかつたんじゃない？キ

「三」

「後が怖すぎるよ！」

水瀬君は慌てた様子で怒鳴った。

「さ、桜井さんは、何が言いたいの？」

「あの時、四方八方から襲われたのに、みんな返り討ちにされたでしょ？きれいに吹っ飛ばされて」

「う……うん」

「死体がね？」

私は円を描くように、仰向けになった死体を次々と指さした。

「ほら。ぐるっと円を描ける。ね？これって、あの時、水瀬君がやったみたいに吹っ飛ばされたと思えない？」

「……う」

水瀬君は口元を尖らせて小さく呻いた。

「何？間違っている？」

「ううん？そうじゃなくて……」

鼻の頭をかくく掻いた水瀬君は、改めて状況を見回し、床に転がっていた腕を再び掴んだ。

「切り口からしても……うーん」

「何？何か手がかりが？」

「手がかりはないけど……」

「何？」

私は切断された腕をなるべく見ないようにして、真顔に厳しい表情を浮かべる水瀬君の横顔をのぞき込んだ。

「桜井さんが騎士ならわかるかもしれないけどね？」

「うん？」

「これ、切り方がものすごく特徴的なんだよ」

「……特徴……的？」

「警察署で見た死体とはちょっと違う」

「……違う……って」

私は思わずびっくりして水瀬君に尋ねた。

「じゃ、これと警察署の件は別!？」

「何とも言えない」

水瀬君ははつきり答えた。

「警察署は間違いなく刃で切っているんだ。切断面に残ったインパクトの痕跡からわかる」

「……」

「でも」

だから！

水瀬君は私に死体の切断した面を見せようとするの！

私は見たくないんだって！

そんなの見たら、しばらくお刺身が食べられないよぉ！

目を背けようとしたけど、私達の間割り込むようにして入って来たのは理沙さんだった。

ふわっ。と香水の匂いがするだけで、理沙さんが大人の女性だと認識させられるし、何より、この異様な匂いの世界から少しだけ救われた気になった。

「この切断面が何なの？」

「うん」

理沙さんの問いかけに水瀬君は答えた。

「これ、真空斬りの痕」

「真空……斬り？」

「うん」

きよとん。とする理沙さんに水瀬君は頷いた。

「剣っていう物理的な攻撃じゃなくて、高速で剣を移動させることで生じる真空波で物体を切断する……理屈では簡単なんだけど、かなり高レベルで、しかもしっかり研鑽した騎士じゃないと出来ない」

「……？」

理沙さんが首をかしげた。

「それが何なの？」

「へ？」

「それでどうして署の件とこの件が別だと？」

「別かもしれないって、そう言ったんだよ」

「だから、何で」

「……理沙さんが騎士だったら、二つの切断面みたら、僕と同じ疑問を持つと思うんだけどなあ……」

「悪かったわね。私のような華麗にして高貴な一般人にもわかるように説明しなさい！」

「……うーん」

少し考えてから水瀬君は続けた。

「警察署の方は、むしろ下手。というか、剣に使われているのがはつきりするような、下手くそな切り口なんだよ。剣の質量でやつと切断しているような……うんと……非力ってというか」

「……」

「それが、ここは全く違う。むしろ剣を使いこなしている。剣と使手の主従関係が逆転してる」

「銃で言えば」

理沙さんは眉間に皺を寄せて呻きながら言った。

「署の方は数発で仕留めて、こっちは一発で確実に仕留めている

そんな感じ」

「似たようなものかもね。この真空斬りが出来るなんて、そうそういないから、逆にわかんないんだよね。どうして、警察署では

」

何故か、はつとなつた水瀬君は、腕を放り捨て、鑑識の間を抜けて一人一人の死体を触れて回った。

「お、おいっ！」

「何だ、君っ！」

作業を邪魔された鑑識官達が怒鳴るのも構わず、水瀬君は手を真っ赤に染めても死体を触れて回ることを止めない。

「構わないわ！」

水瀬君を止めようとした鑑識官を制するように理沙さんが怒鳴った。

「そのまま続けさせて！」

「しかしっ！」

「抗議は後で聞く！」

「……」

水瀬君がしゃがみ込んでのぞき込んでいるのは、頭を吹き飛ばされ、中身を撒き散らした体格の良い男の死体。

傷口を何度も触りながら、水瀬君は何かを調べている。

「……」

すつと立ち上がると、ポケットから取り出したティッシュで手を拭きながら水瀬君は口を開いた。

「……犯人は騎士で、身長は僕と同じ位……性別は靴痕からして女性」

「署の犯人と同一人物だと？」

「切り口の位置からして、そうなる」

「……何がわかったの？」

「魔素の反応が、ここでは弱い」

「弱い？」

「……気付いたんだ」

「気付いた？」

「そう……署ではあんなにはっきりしてた魔素の反応がここではほとんど残っていないし、切り口も精緻になっている。これ、どうしてだろうって考えて」

「……で？」

「呪具が使われているんだろうと仮定した上で」

「構わないわ。教えて」

「署にいた時、呪具は持ち主をまだコントロール出来ていなかった。コントロールする自信がなかったから、擬装まで思いついた。でも、ここでそれをやっていないのは、逆に言えば持ち主をコントロール下に置けたという宣言でもある」

「呪具に使われていた。から、呪具と一体化したとでも？」

「近いと思う……」

「……」

「この真空斬りは多分、呪具の力じゃなくて持ち主が本来もっている技量。でなければ、署で使わなかった理由がない。はつきり、相
当な腕前」

「……」

「……他には？」

「……ない」

「ない？」

「……うん」

「……」

「……」

「……そう」

理沙さんははあつ。とため息をつくと言った。

「わかった。私、もう少し、ここで調べることがあるから、後、学
校に戻って頂戴」

「……いいの？」

「いい」

ちよつとびつくりした顔の水瀬君に、理沙さんは答えた。

「そろそろマスコミも来るわ。いろいろマズいでしょ？」

その後、近くの公園で手を洗う水瀬君をベンチで眺めていた。

わからない。

何かひっかかる。

何が？

水瀬君、何か隠している。

水瀬君は、犯人がわかつている。

にもかかわらず、どうしても隠そうとしているようにしか思えな

い。

でも、どうして？

手にこびりついた血を洗い落としてハンカチで拭き続けるその背中を眺めながら不思議に思う。

犯人を、どうして水瀬君が庇う必要があるの？

ブルルッ

ブルルッ

不意に携帯電話のバイブが動いた。

理沙さんからメールだ。

「……」

文面を読み終えた私は「了解」とだけ返信した。

「お待たせ」

水瀬君が近づいてきたのは、送信が終わった時だ。

「落ちた？」

「うん」

「そう。じゃ、ここからならもう安全だから、私、着替えてから学校に行く。水瀬君も」

「御免」

水瀬君は不意に答えた。

「僕、ちよつと行くところが」

「……そう」

「御免ね？」

「明日は来てよね？」

「うん」

頷くと踵を返そうとした水瀬君の背中に、私は呼びかけた。

「きつと謝りたいと思っているはずだし！」

「誰が？」

「高原さん！」

……えっ？

私は、その時、目の錯覚でも起こしたんだろうか？
うっん。

そんなハズはない。

でも、それならどうして？

水瀬君は、今、確実に高原さんの名前に反応した。

ほんの少しだけ、動揺したんだ。

それが悲しいくらい、私にはわかった。

「……水瀬君？」

「う、うんっ！」

水瀬君は無理に笑顔をつくって頷いた。

「また、明日っ！」

たっ。

そのまま駆けだした水瀬君を、私は止めることが出来なかった。

私が登校したのはお昼になってからだ。

警察に協力していることは先生にも知られているから、お咎めは無かったけど、私はすぐに教室に入るなり、葉山君に訊ねた。

「高原のクラス？」

「そう」

焼きそばパンをかじっていた葉山君は首をかしげた。

「そんなこと知って、どうするんだ？」

「あの子に、直に聞きたいことがあるの」

「……エリカに聞こう」

葉山君は席を立って、私はその後が続いた。

「高原？」

クラスの入り口でばったり出会ったのは聖護院エリカ先輩だった。驚いたことに、向こうも高原さんを探していた。

「そつちも知らないの？」

「桜井が話があるっていうから、お前ん所に聞きに行くところだったんだ」

「……それがね？」

エリカ先輩は怒っているといわんばかりに腕組みして言った。

「朝練にも出てこないのよ、アイツ！昨日、あんな騒ぎ起こして反省の色がない！」

「朝練に？」

「そう！朝練の時には一年が床掃除するって決まりで、アイツ、一年のリーダーのクセして一人だけ出てこないのよ！ふざけんなっての！」

「……今まで、そんなことあったのか？」

「ううん？」

エリカ先輩は首を横に振った。

「アイツ、生真面目な性格だから風邪引いてぶっ倒れる寸前でも朝練に出てきたけどさあ」

「……登校しているのか？」

「それが、してないのよ」

「電話は」

「通じないっていうか」

エリカ先輩は呼び出し記録の羅列を見せた。

「出ないのよ。先輩から呼び出されてね」

「アイツ、家族は」

「近くにアパート借りているんだって。詳しく知らないけどさ」

「アパート？」

「ご両親が亡くなって、身寄りが無いんだって」

「……」

「何かあつたんじゃないのか？」

「……」

エリカ先輩もやっとそこで頷いた。

「だから、下手に意固地になつて何かしでかしてくれたんじゃないかつて、今になつて心配になつて……それで、昨日の件もあるから、桜井さんだっけ？何か知ってるんじゃないかつて」

「……いえ」

私も首を横に振るしかない。

「……ちよつと」

葉山君は言った。

「南雲先生に相談してくる」

「南雲先生に？」

「ああ。何かあつたら、あの先生が一番頼りになるからな」

「私も行くわ」

「私も」

私達が向かったのは、職員室だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6955k/>

恋と魔法と妖剣と

2011年12月9日23時54分発行